川崎市青少年科学館紀要, (35) : 7-14, Mar. 2025

報　告

生田緑地におけるムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* の生息状況について

髙中健一郎*

Inhabitation status of *Hierodula chinensis* in Ikuta Ryokuchi Park, Kawasaki City.

Kenichiro Takanaka*

はじめに

外来種であるムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* Werner, 1929 については、福井県 (藤野ほか, 2010) で発見されたハラビロカマキリ属の不明種が日本での初記録とされ、その後も埼玉県 (田留ほか, 2017)、岐阜県 (市川, 2014)、静岡県 (酒井・北原, 2019)、広島県 (谷ほか, 2021)、愛知県 (吉鶴, 2012)、東京都 (会羽, 2015)、神奈川県 (川島・渡辺, 2016) で記録されている。本種については Yamasaki *et al.* (2022)、Matsumoto (2022) によって中国原産のムネアカハラビロカマキリ *H. chinensis* Werner, 1929 (Werner, 1929; Wang *et al.* 2020; Liu *et al*. 2020; 2021) と同種であることが報告されており、本稿でもこれにならい、学名は *H. chinensis* として扱う。

本種の侵入経路は、中国から輸入された竹箒に卵鞘が付着していたことが確認されており、竹箒を経由して日本に侵入、定着したと考えられている (松本, 2017; 櫻井ほか, 2018a, 2018b; 和田, 2018, 苅部・加賀, 2019; 碓井, 2020)。その侵略性については各地から報告があり、侵入後同属種であるハラビロカマキリが激減することが記録されている (吉鶴, 2014; 間野・宇野, 2015; 高橋・岸, 2016; 松本ほか, 2016; 渡邊ほか, 2017)。

一方、生田緑地は川崎市多摩区と宮前区にまたがる緑地で、主にクヌギ *Quercus acutissima* Carruth.、コナラ *Q. serrata* Murray を中心とした雑木林や谷戸部の湿地、湧水等の自然環境で構成されている。周辺は市街地に囲われており、面積 179.7ha の孤立した緑地で、が来園する。緑地へ訪れる利用者も年間に約 80 万人と多く、年間を通して一定の人流がある。

生田緑地では 2015 年に本種の初記録が、川島・渡辺 (2016) によって報告さており、それ以降、ムネアカハラビロカマキリとハラビロカマキリの完全な置き換わりには至っていなかったが、ムネアカハラビロカマキリが高い割合を占めていた (髙中ほか, 2022)。その後も、高い割合のまま徐々に種の置き換わりが進行していることが報告されている (髙中・服部, 2023; 髙中, 2024)。

本稿では、ムネアカハラビロカマキリとハラビロカマキリの生息状況について引き続き調査を実施したので、その結果を報告する。

材料および方法

調査では、ムネアカハラビロカマキリとハラビロカマキリの経年変化を調査するため、これまで (髙中ほか, 2022; 髙中・服部 2023; 髙中 2024) と同様に生田緑地内に 3 つの調査ルート (図 1) を設定し、2024 年 7 月から 11 月にかけて週に 1 回、時速 1.2km 程度で各ルートを歩き、上空 5m、左右 2m の調査幅を目安にルートセンサスを行った。

それぞれの主な環境と調査距離は、ルート A が枡形山の山頂にある開けた環境の枡形山広場、開けた水辺谷戸のホタルの里、湿地のあるハンノキ林などを含む約 2.4km、ルート B が芝生の広がる開けた環境の中央広場、林に囲まれた奥の池、ツツジ類が植栽され開けた環境のつつじ山などを含む約 2km、ルート C が開けた水辺環境の菖蒲園などを含む約 2km である。

両種の識別について、ムネアカハラビロカマキリは、前脚基節上部に多数の小さな疣 (図 2) がみられるのに対し、ハラビロカマキリは前脚基節上部に淡い黄土色の疣が 3 つ程度 (図 3) であるため、前脚基節上部の疣の数で識別できる (Werner, 1929; 吉鶴, 2012, 2014; 間野・宇野, 2014; Wang *et al.* 2020; Liu *et al*. 2020; 2021; 大島, 2021)。この前脚基節上部の特徴については、ムネアカハラビロカマキリ、ハラビロカマキリの両種とも 3 齢幼虫以降から発現することが報告されている (大島, 2021)。

ルートセンサス調査では、樹の幹、植物の葉の上下などの自然物のほか、園路上や緑地内に設置してある柵、看板などの人工物も含め、目視できる範囲でムネアカハラビ

*川崎市青少年科学館 (かわさき宙と緑の科学館) Kawasaki Municipal Science Museum

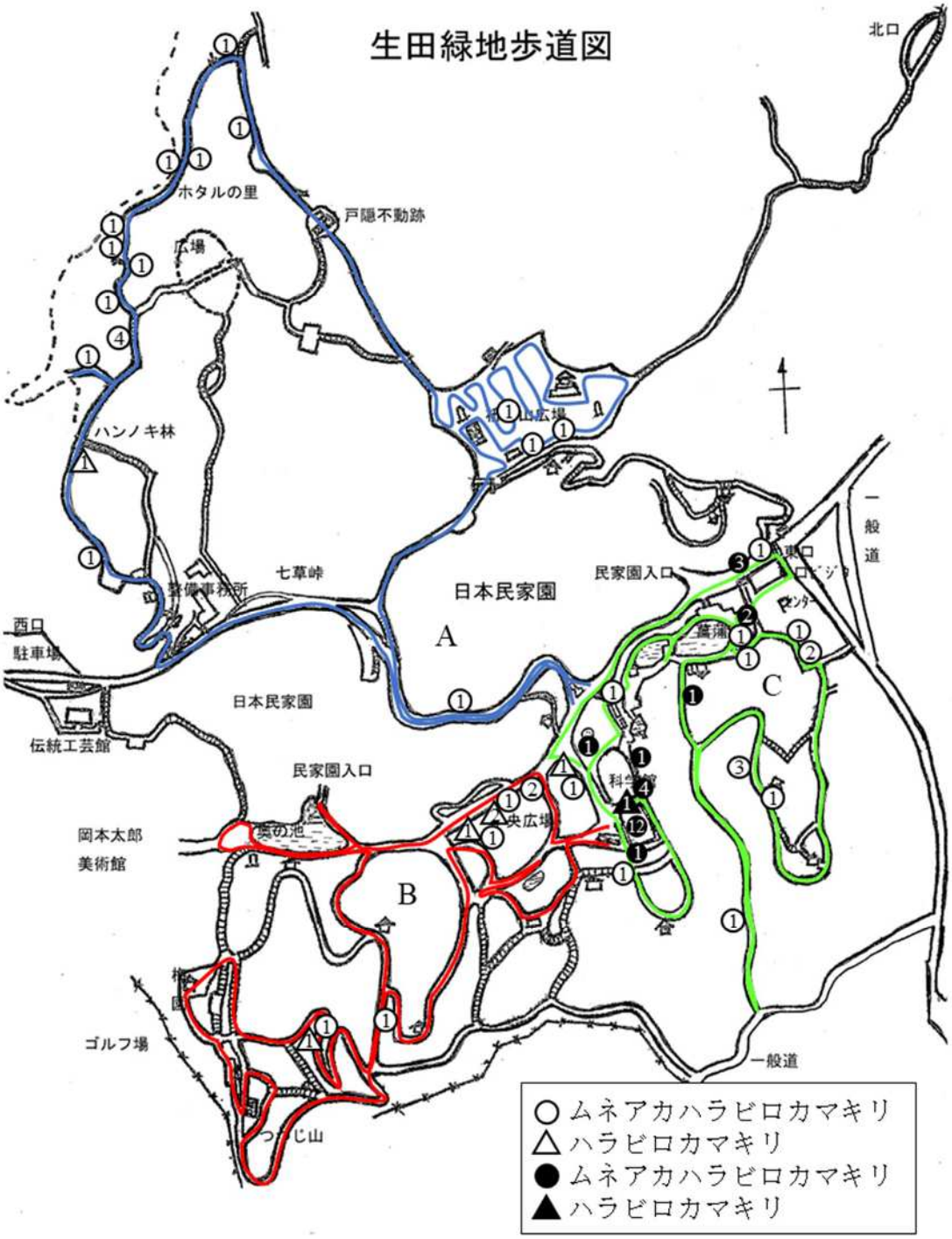

図 1. 生田緑地内の調査ルート位置と各個体の捕獲地点
*白抜きの○と△は、ルートセンサスで捕獲した個体、黒塗りの●と▲は、ルートセンサス外で捕獲した個体を、記号内の数字は個体数を示す。

ロカマキリとハラビロカマキリを見つけ取りした。捕獲した個体については、幼虫、成虫、性別を記録した。ルートセンサス以外でも生田緑地内で確認できた個体を捕獲し、幼虫、成虫、性別を記録した。記録後、ムネアカハラビロカマキリは駆除し、ハラビロカマキリは捕獲した場所に放逐した。ムネアカハラビロカマキリでは幼虫、成虫、性別

図 2. ムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* Werner, 1929 幼虫の前脚基節上部の疣

図 3. ハラビロカマキリ *Hierodula petellifera* (Serville, 1839) 幼虫の前脚基節上部の疣

について χ^2 検定で統計処理を行った。また、個体を確認した場所が自然物であったか人工物であったか、捕獲した地面からの概ねの高さについて記録した。捕獲した高さは、10cm 単位で記録し、50cm 間隔でまとめ、地面は 0cm として記録した。

捕獲できたハラビロカマキリ属の割合を示すとともに、ルートセンサスでの 1 回あたり個体数を算出し、これまでの結果 (髙中ほか, 2022; 髙中・服部, 2023; 髙中, 2024) と比較し、ムネアカハラビロカマキリの 1 回あたりの個体数については Friedman 検定で統計処理を行った。

結果

表 1 に示した通り、今回確認できたハラビロカマキリ属は計 70 個体であった。ムネアカハラビロカマキリは、ルート A で 18 個体、ルート B で 7 個体、ルート C で 13 個体、ルートセンサス以外で 25 個体、計 63 個体であった (図 1, 表 1)。ルート C では 7 月 18 日にオオカマキリ *Tenodera sinensis* Saussure, 1871 の幼虫がムネアカハラビロカマキリの幼虫を捕食している場面を目撃した (図 4)。

ハラビロカマキリはルート A で 1 個体、ルート B で 5 個体、ルート C で 0 個体、ルートセンサス以外で 1 個体、計 7 個体であった (図 1, 表 1)。ルートセンサスで捕獲したハラビロカマキリ属の割合は、ムネアカハラビロカマキリが 44 個体中 38 個体で 86.4%、ハラビロカマキリが 44 個体中 6 個体で 13.6%であった。

捕獲個体すべてについての捕獲場所をみると、ムネアカハラビロカマキリが自然物で 22 個体、人工物で 41 個体、ハラビロカマキリが自然物で 5 個体、人工物で 2 個体であった (表 1)。それぞれの捕獲位置は図 1 に示す。個体を捕獲した地面からの概ねの高さは図 5 に示した通り、ムネアカハラビロカマキリは 60～100cm の高さでの捕獲が最も多く、次いで 1000cm (科学館屋上) で捕獲が多かった。ハラビロカマキリは 160～200cm 高さでの捕獲が最も多かった。

ムネアカハラビロカマキリは 7 月から 9 月までと、11 月に確認された。幼虫は 7 月から 8 月までに計 52 個体を捕獲できた。成虫は 8 月 21 日以降に確認され、9 月以降はいずれも成虫で、計 11 個体を捕獲できた。ハラビロカマキリは 8 月と 10 月に確認され

表 1. 各調査ルートでの確認個体数

	種名	学名	7月		8月		9月		10月		11月		計		計
			自然	人工	自然	人工	自然	人工	自然	人工	自然	人工	自然	人工	
ルートA	ムネアカハラビロカマキリ	*Hierodula chinensis*	2	6	4	5	1	0	0	0	0	0	7	11	18
	ハラビロカマキリ	*Hierodura. patellifera*	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1
ルートB	ムネアカハラビロカマキリ	*Hierodula chinensis*	0	0	6	0	1	0	0	0	0	0	7	0	7
	ハラビロカマキリ	*Hierodura. patellifera*	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	0	5
ルートC	ムネアカハラビロカマキリ	*Hierodula chinensis*	2	3	2	6	0	0	0	0	0	0	4	9	13
	ハラビロカマキリ	*Hierodura. patellifera*	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ルートセンサス以外	ムネアカハラビロカマキリ	*Hierodula chinensis*	0	13	2	7	1	0	0	0	1	1	4	21	25
	ハラビロカマキリ	*Hierodura. patellifera*	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1
計	ムネアカハラビロカマキリ	*Hierodula chinensis*	4	22	14	18	3	0	0	0	1	1	22	41	63
	ハラビロカマキリ	*Hierodura. patellifera*	0	0	5	0	0	0	0	2	0	0	5	2	7

*自然は自然物で、人工は人工物で個体を確認したことを示す。

図 4. ムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* Werner, 1929 の幼虫を捕食するオオカマキリ *Tenodera sinensis* Saussure, 1871 の幼虫

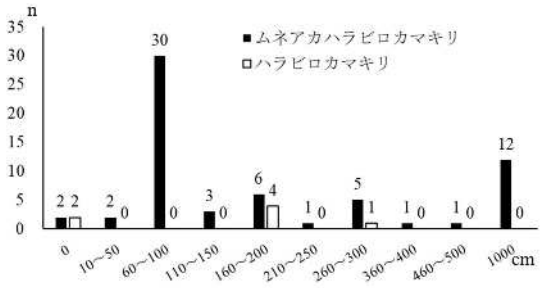

図 5. ハラビロカマキリ属の個体を捕獲した際の地面からの高さ
*捕獲した高さは、10cm 単位で記録し、50cm 間隔でまとめ、地面は 0cm とした。
*捕獲がなかった高さは除外し、1000cm は科学館屋上での捕獲数を示す。

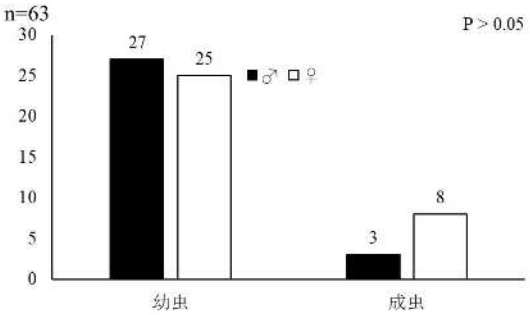

図 6. 捕獲したムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* Werner, 1929 の幼虫および成虫の雌雄数
*P 値は χ^2 検定による。

た。幼虫は 8 月に計 3 個体を捕獲できた。成虫は 8 月と 10 月に計 4 個体を捕獲でき

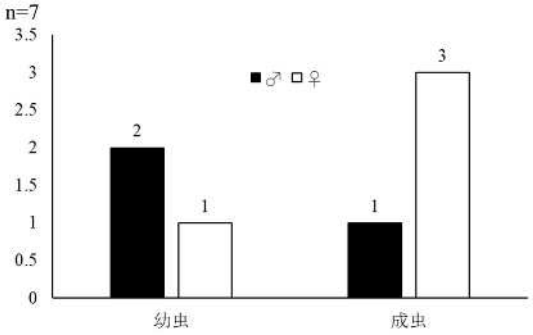

図 7. 捕獲したハラビロカマキリ *Hierodula petellifera* (Serville, 1839) の幼虫および成虫の雌雄数

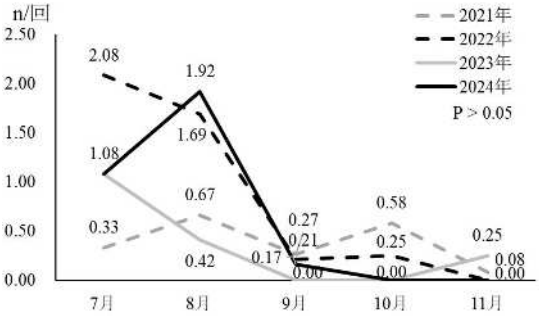

図 8. ルートセンサスによるムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* Werner, 1929 の月ごとの 1 回あたりの個体数推移
*P 値は Friedman 検定による。

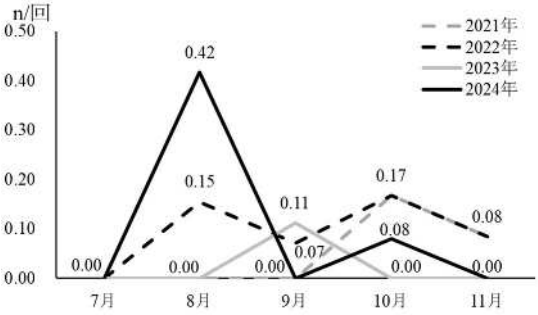

図 9. ルートセンサスによるハラビロカマキリ *Hierodula petellifera* (Serville, 1839) の月ごとの 1 回あたりの個体数推移

た。なお、ハラビロカマキリの記録については、今回の調査では捕獲後に個体を放逐していることから、別日での同じ個体を記録している可能性があるため、便宜上、延べ個体数を捕獲個体数として取り扱った。

幼虫および成虫、雌雄の内訳は、ムネアカハラビロカマキリでは、幼虫の雄が 27 個体、雌が 25 個体、成虫の雄が 3 個体、雌が 8 個

体であり (図 6)、幼虫、成虫の雌雄には有意差がみられなかった (P>0.05)。ハラビロカマキリでは、幼虫の雄が 2 個体、雌が 1 個体、成虫の雄が 1 個体、雌が 3 個体であった (図 7)。

ルートセンサスの結果、ムネアカハラビロカマキリの 1 回あたりの個体数は 8 月にピークを示し、9 月にかけて激減し、10 月、11 月は 0 個体となった (表 1, 図 8)。一方、ハラビロカマキリの 1 回あたりの個体数は 8 月にピークを示したが、その後は 10 月にのみ低頻度で確認できただけであった (表 1, 図 9)。ムネアカハラビロカマキリは、これまで (髙中ほか, 2022; 髙中・服部 2023; 髙中 2024) との個体数推移との相関はみられなかった (P > 0.05)。捕獲個体の情報は、以下の通りである。

蟷螂 (カマキリ) 目　Order Mantodae
カマキリ科　Famiry Mantidae
ムネアカハラビロカマキリ　*Hierodula chinensis* Werner, 1929

1♂, (幼虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240704, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240704, 髙中健一郎採集; 2♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240705, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240706, 髙中健一郎採集; 3♂, (幼虫); 1♀, (幼虫), 多摩区枡形6丁目, 20240707, 髙中健一郎採集; 1♂, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240710, 髙中健一郎採集; 2♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240711, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240714, 髙中健一郎採集; 1♂, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240716, 髙中健一郎採集; 1♂, (幼虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240717, 髙中健一郎採集; 3♂, (幼虫); 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240718, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240720, 髙中健一郎採集; 1♂, (幼虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240728, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240728, 髙中健一郎採集; 2♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240730, 髙中健一郎採集; 2♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240731, 髙中健一郎採集; 4♂, (幼虫); 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240801, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240801, 髙中健一郎採集; 1♂, (幼虫); 2♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240802, 髙中健一郎採集; 5♂, (幼虫); 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240806, 髙中健一郎採集; 2♀, (幼虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240807, 髙中健一郎採集; 1♂, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240808, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240809, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240809, 髙中健一郎採集; 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240811, 髙中健一郎採集; 3♂, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240815, 髙中健一郎採集; 1♂, (成虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240821, 髙中健一郎採集; 2♂, (幼虫); 2♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240821, 髙中健一郎採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240825, 鷲尾幸俊採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240828, 髙中健一郎採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240831, 髙中健一郎採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240908, 髙中健一郎採集; 1♂, (成虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20240912, 髙中健一郎採集; 1♂, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240922, 髙中健一郎採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20241108, 髙中健一郎採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20241112, 津田由美子採集

ハラビロカマキリ *H. petellifera* (Serville, 1839)

2♂, (幼虫); 1♀, (幼虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20240806, 髙中健一郎採集; 2♀, (成虫), 多摩区枡形7丁目, 20240821, 髙中健一郎採集; 1♂, (成虫), 多摩区枡形 6 丁目, 20241002, 髙中健一郎採集; 1♀, (成虫), 多摩区枡形 7 丁目, 20241014, 髙中健一郎採集

考察

ルートセンサスの結果について、髙中・服部 (2023)、髙中 (2024) と比較すると、髙中・服部 (2023) ではムネアカハラビロカマキリが 53 個体、ハラビロカマキリが 6 個体、髙中 (2024) ではムネアカハラビロカマキリが 19 個体、ハラビロカマキリが 1 個体であったのに対し、本調査ではムネアカハラビロカマキリが 38 個体、ハラビロカマキリが 6 個体であった (表 1)。

これまでムネアカハラビロカマキリの生息が確認された地域では、ハラビロカマキリの生息を確認できなくなった (吉鶴,

2014; 高橋・岸, 2016; 伊與田ほか, 2022) と各地から報告されている。その中には、在来のハラビロカマキリが排除されている可能性 (吉鶴, 2014) や、年を追うごとにムネアカハラビロカマキリの割合が高くなっている (間野・宇野, 2015)、ムネアカハラビロカマキリが最初の確認から十数年の間に急激に増加し、ハラビロカマキリと入れ替わった (渡邊ほか, 2017) との報告もある。

生田緑地での調査 1 回あたりのムネアカハラビロカマキリの個体数については、髙中 (2024) では、髙中・服部 (2023) と比べ、ムネアカハラビロカマキリは 36%まで、ハラビロカマキリは 17%まで個体数が減少していた。一方で、本調査では髙中 (2024) と比べ、ムネアカハラビロカマキリは 2 倍、ハラビロカマキリは 6 倍により増加していたことから、年々による個体数の変動の可能性も考えられるが、昨年に比べムネアカハラビロカマキリの個体数が減り、ハラビロカマキリの個体数が増加していた。

その割合は髙中・服部 (2023) でムネアカハラビロカマキリが 89.8%、ハラビロカマキリが 10.2%、髙中 (2024) でムネアカハラビロカマキリが 95.0%、ハラビロカマキリが 5.0%であったのに対し、本調査ではムネアカハラビロカマキリが 86.4%、ハラビロカマキリが 13.6%であり、昨年よりハラビロカマキリの割合が 8.6%増加していた。これまで生田緑地での両種の置き換わりについては、ムネアカハラビロカマキリが高い割合を占めながら、割合を微増し、種の置き換わりが進行していたが (髙中, 2024)、本調査では、その置き換わりが後退している状況にあった。

今回、オオカマキリの幼虫がムネアカハラビロカマキリの幼虫を捕食している場面を目撃している (図 4)。図 4 に示したとおり、7 月時点でオオカマキリがムネアカハラビロカマキリより二回りほど体が大きいことから、両種が遭遇した際、オオカマキリが有利に捕食していると思われた。

また 1 回あたりの個体数についても、ムネアカハラビロカマキリは髙中 (2024) と比べ、7 月は同じ割合、8 月は 4 倍以上まで増加していたが、9 月は低頻度で微増し、10 月と 11 月は 0%であり、9 月から 11 月の割合は髙中・服部 (2023)、 髙中 (2024) と同様に低頻度を示した (図 8)。捕獲されたムネアカハラビロカマキリの性別をみると (図 6)、雌雄の個体数に有意差は無く ($P > 0.05$)、成虫よりも幼虫の捕獲が多かった。これには幼虫期での捕獲量が関わっていると考えられる。

ムネアカハラビロカマキリの捕獲場所をみると (表 1)、自然物が 22 個体、人工物が 41 個体であった。捕獲した際の地面からの高さでは、60～100cm の高さでの捕獲が最も多く、人の手が容易に届く範囲でみると、0~150cm の高さでは、捕獲できた 63 個体の 55.6%となる 37 個体を捕獲できた (表 1)。

すなわち、自然物では、自然環境に紛れた状態での個体を見つける慣れが必要だが、本調査においても髙中 (2024) と同様に人工物での捕獲が多かったことから、一般人でも比較的見つけやすい高さと環境で、かつ捕虫網を要しない人の手が容易に届く範囲でムネアカハラビロカマキリを捕獲できることが示唆された。

謝辞

今回、実施したルートセンサス以外に、当館職員津田由美子氏、来館者の鷲尾幸俊氏には生田緑地で捕獲したムネアカハラビロカマキリを科学館に持ち込んでいただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

引用文献

会羽草生, 2015. 多摩森林学園におけるムネアカハラビロカマキリ Hierodula sp. 卵嚢の記録. うすばしろ, (46) : 22.

藤野勇馬・岩崎 拓・市川顕彦, 2010. 福井県敦賀市でハラビロカマキリ属不明種の成虫と卵嚢を採集. 昆虫と自然, 43 (5) : 32-34.

市川顕彦, 2014. 愛知県・岐阜県・福井県で採集されたハラビロカマキリの一種について. 月刊むし, (524) : 17-22.

伊與田翔太・根本宗一郎・髙坂晴香・幸村帆夏・佐橋拓弥・岸村晋作・犬飼瑠那・杉浦宏亮・長坂優斗・白石友也・立脇隆文, 2022. 愛知県岡崎市におけるムネアカハラビロカマキリとハラビロカマキリの分布状況. 豊橋市自然史博物館研報, 32 : 1-7.

苅部治紀・加賀玲子, 2019, 神奈川県におけるムネアカハラビロカマキリの新産地と

分布拡大に関する生態的知見. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (48) : 75-80.
川島逸郎・渡辺恭平, 2016. 神奈川県川崎市で確認された外来種ムネアカハラビロカマキリ (カマキリ目, カマキリ科) . 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (45) : 97-99.
Liu, Q. P., Z. J. Liu, Z. T. Chen, Z. L. Yuan and Y. Shi, 2020. A new species and two new species records of Hierodulinae from China, with a revision of *Hierodula chinensis* (Mantodea : Mantidae). *Orient Insect*, 55: 99-118.
Liu, Q. P., Z. J. Liu, G. L. Wang and Z. X. Yin, 2021. Taxonomic revision of the praying mantis subfamily Hierodulinae of China (Mantodea Mantidae). *Zootaxa*, 4951 (3) : 401-433.
間野隆裕・宇野聡一, 2014. 豊田市におけるハラビロカマキリとムネアカハラビロカマキリの分布動態と形態について. 矢作川研究, (18) : 41-48.
間野隆裕・宇野聡一, 2015. 矢作川流域におけるムネアカハラビロカマキリの分布拡大. 矢作川研究, (19) : 107-112.
松本和馬・佐藤理絵・井上大成, 2016. 東京都八王子市の森林総合研究所多摩森林科学園におけるムネアカハラビロカマキリの侵入定着とハラビロカマキリの衰退. 日本環境動物昆虫学会誌, 27 (2) : 53-56.
松本和馬, 2017. 竹箒についていたムネアカハラビロカマキリの古い卵嚢. うすばしろ, (51) : 16-17.
Matsumoto. K, 2022. Changes in relative abundance of co-occurring native and alien mantids, *Hierodula patellifera* (Serville) and *Hierodula chinensis* Werner (Mantodea Mantidae), in Hachioji City, Tokyo Metropolis. 日本環境動物昆虫学会誌, 33 (2) : 43-52.
大島千幸, 2021. 日本産カマキリ目の若虫と雌外部生殖器の形態および分類学的研究. 東京農業大学博士論文. 63-109.
酒井孝明・北原佳郎, 2019. 伊豆の国市におけるムネアカハラビロカマキリの記録. 東海自然誌, (12) : 109-113.
櫻井 博・苅部治紀・加賀玲子, 2018a, ムネアカハラビロカマキリの非意図的導入事例 －中国から輸入された竹箒に付着した卵鞘－. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (47) : 67-71.
櫻井 博・苅部治紀・加賀玲子, 2018b, ムネアカハラビロカマキリの侵入要因と拡散防止のための方策. 昆虫と自然, 53 (11) : 15-18.
田留健介・早乙女将史・柳沼薫, 2017. 埼玉県内におけるムネアカハラビロカマキリ *Hierodula* sp.の初記録. 埼玉県立自然の博物館研究報告, (11) : 57-58.
高橋孝洋・岸 一弘, 2016. 神奈川県で生息が確認されたムネアカハラビロカマキリ. 月刊むし, (544) : 48-50.
髙中健一郎, 2024.生田緑地におけるムネアカハラビロカマキリ *Hierodula chinensis* の個体数抑制の可能性について. 川崎市青少年科学館紀要, 34 : 3-10.
髙中健一郎・服部隆博, 2023. 生田緑地におけるハラビロカマキリ属の生息状況について. 川崎市青少年科学館紀要, 33 : 3-12.
髙中健一郎・本郷智子・髙橋 裕・津田由美子, 2022. 生田緑地における外来種ムネアカハラビロカマキリ *Hierodula* sp.の生息状況について. 川崎市青少年科学館紀要, 32 : 3-8.
谷聖太郎・丸田理温・児玉敦也・斉藤英俊・河合幸一郎, 2021. 広島県東広島市における不明種ムネアカハラビロカマキリの記録, 他地域個体との形態比較, 及び近縁他種を用いた分子系統解析. 日本環境動物昆虫学会誌, 32 (2) : 61-68.
碓井 徹, 2020. 市販竹箒に付着のムネアカハラビロカマキリの卵鞘, 3 例目の発見. 寄せ蛾記, (175) : 57-60.
和田武久, 2018. 東京都国立市で竹箒についたムネアカハラビロカマキリの卵鞘を採集. うすばしろ, (54) : 9-10.
Wang, Y., S. Zhou and Y. Zhang, 2020. Revision of the genus *Hierodula* Burmeister (Mantodea : Mantidae) in China. *Entomotaxonomia*, 42 : 1- 21.
渡邊まゆみ・手塚真理・高橋孝洋, 2017. 秦野市葛葉緑地周辺におけるハラビロカマキリとムネアカハラビロカマキリの卵鞘の形態と分布状況について. 神奈川自然誌資料, (38): 53–58.
Werner, F., 1929. Über einige Mantiden aus China (Expedition Stötzner) andere neue oder seltene Mantiden des Museums für Tierkunde

in Dresden. (Orth). *Stettiner Entomologische Zeitung*, 90 : 74-78.

Yamasaki K., Kai Schütte & T. Nawa, 2022. New record of Chinese Reddish Mantis, *Hierodula chinensis* Werner, 1929 (Mantodea, Mantidae) from Japan, *Check List* 18 (1) : 147-150.

吉鶴靖則, 2012. 矢作川中流域で激減しているハラビロカマキリ. 豊田市矢作川研究所　月報 Rio, (170) : 5-6.

吉鶴靖則, 2014. 愛知県矢作川中流域における外来性ハラビロカマキリ属の一種の分布状況. 豊田市自然史博物館研報, (24) : 1-5.